

化石を求めて、フィールドに行く。



三浦半島にて竹内誠教授と同期の仲間。講義「堆積岩成因論」の現地討論会。

加藤さん



サウスダコタのフィールドで。



アメリカ、サウスダコタの冷水炭酸塩岩から産出したHemiaster. sp (ブンブクウニの仲間)。

地球環境科学専攻 地球史学講座 加藤 萌さん 博士前期課程2年

子どもの頃から化石や恐竜が大好きだった加藤さん。「机に向かっての研究より、フィールドで化石を掘りたい」と、名古屋大学に。今は、ウニやヒトデの仲間である棘皮動物きょくひをテーマに研究に取り組んでいる。

「冷湧水」という特殊な地層が残るアメリカの内陸部で、棘皮動物の化石を探してサンプルをとり、分析を試みる。白亜紀末期—約7300万年前—、彼らはその時代に、どのような環境で、どう生きていたのだろうか。推論を重ねていくと「棘皮の気持ちになっちゃう」と笑う。いい化石に出会えば喜び、一日粘っても巡り合えない日は落ち込む。そんな繰り返しも楽しい日々だ。

地球科学を専攻する学生の間では、「Ma」という単語が飛び交う。1Maは100万年。白亜紀末期は73Ma、人類は誕生してまだ4Ma。「短期間で高度な文明を発達させた人類はすごいと言われますが、数Maで形態を変えるものもいた三葉虫やアンモナイトの方がすごいと思う」と加藤さん。悠久の時の流れの中で生きた生命に思いをはせる。

夢は研究者の道に進むこと。幅広い知識と行動力がある指導教授の大路樹生先生のような研究者に。そのために越えなければならない課題は、まだまだたくさんあると思っている。